

前回私たちは、ミレトにおいて、パウロがエペソの長老たちに別れのメッセージを語るのを見ました。パウロはエペソで、三年もの間、謙遜の限りを尽くし、涙をもって主に仕えたわけですが、実にそれは、彼自身と彼を通して福音にあずかる者がみな、御国を継ぐためでした。パウロをして、反対者たちからの激しい迫害を耐え忍んだのも、そのためです。でも、そのような歩みは、彼が主に救われていたからこそ、できたのであって、決して救われるためのものではありませんでした。誰よりも主の恵みを知るパウロは、「受けるよりも与えるほうが幸いである」という主のみことばを示すために、その生き方をもって主を証したのです。

さて、パウロとその一行は、長老たちに別れを告げ、ミレトから出帆します。そして、いくつかの町を経て、エルサレムに到着するのです。今日の箇所には、その途中、ツロとカイザリヤに寄った際に、そこで起こった出来事について記されています。どちらの町でも共通していたこと、それはエルサレムでパウロの身に起こることを御霊が示された、ということです。

まずツロでのことを見ます。4節「私たちは弟子たちを見つけ出して、そこに七日間滞在した。彼らは、御霊に示されて、エルサレムに上らぬようと、しきりにパウロに忠告した」。ツロの町には、ステパノの殉教を機に、エルサレムで起こった迫害から逃れたクリスチャンたちが住んでいました。パウロたちは、そこに着くと、彼らを見つけ出し、そこで七日間滞在するのです。その際に「何を」とは記されていませんが、御霊に示された彼らは、エルサレムに上らぬようと、しきりにパウロに忠告しました。

続くカイザリヤでは、8-12節。「翌日そこを立って、カイザリヤに着き、あの七人のひとりである伝道者ピリポの家に入って、そこに滞在した。9 この人には、預言する四人の未婚の娘がいた。10 幾日かそこに滞在していると、アガボという預言者がユダヤから下って来た。11 彼は私たちのところに来て、パウロの帯を取り、自分の両手と両足を縛って、「『この帯の持ち主は、エルサレムでユダヤ人に、こんなふうには縛られ、異邦人の手に渡される』と聖霊がお告げになっています」と言った。12 私たちはこれを聞いて、土地の人たちといっしょになって、パウロに、エルサレムには上らないよう頼んだ」。

まず注目したいのは、カイザリヤに着いたパウロたちが、伝道者ピリポの家に泊まった、ということです。ここに記されているように、このピリポとは、「あの七人のひとり」、つまり、エルサレム教会の執事として、ステパノと共に奉仕する者として選ばれた御霊と知恵と信仰に満ちた人でした。一方のパウロは、ステパノを殺すことに賛成し、彼を石打ちする者たちの上着の見張り番をしていたのです。そんな二人が、今は共に主に仕えている。当然といえば、当然かもしれませんが、ここに福音の力、主の血による和解の力を見るのです。

さて、パウロたちがピリポの家に滞在している時に、預言者アガボという人がユダヤから下ってきました。彼は、以前アンテオケで、世界中に大ききんが起こる（使 11:28）と告げた預言者と同一人物であると思われる。そのアガボが、今回は、エルサレムでパウロの身に起ころうとしていることを聖霊によって告げたのです。そして、それはパウロをして、彼がユダヤ人たちに縛られ、異邦人の手に渡される、というものでした。それを聞いたパウロの一行とカイザリヤの弟子たちは、エルサレムには上らぬよう、パウロに頼むのです。

そこまで人々に止められると、さすがのパウロも、心くじけそうになったのでしょうか。でも、エルサレムに行くことを主の御心と確信していたパウロは、彼らにこう答えます。13節「するとパウロは、『あなたがたは、泣いたり、私の心をくじいたりして、いったい何をしているのですか。私は、主イエスの御名のためなら、エルサレムで縛られることばかりでなく、死ぬことさえも覚悟しています』と答えた」。

パウロはなぜ、ここまで人々から「行くな」と言われても、その思いを変えることがなかったのでしょうか？彼がただ頑固だったから、人々の意見などとも聞かない人だったからですか？いいえ。それはエルサレムに行くことが、聖霊によって示されていたことだからです。使 19:21「これらのことが一段落すると、パウロは御霊の示しにより、マケドニヤとアカヤを通ったあとでエルサレムに行くことにした。そして、『私はそこに行ってから、ローマも見なければならぬ』と行った」。また前回のエペソの長老たちに語ったところでも彼はこう語っています。使 20:22-23「いま私は、心を縛られて、エルサレムに上る途中です。そこで私にど

んなことが起こるのかわかりません。23 ただわかっているのは、聖霊がどの町でも私にはっきりとあかしされて、なわめと苦しみが私を待っているとされることです」。

パウロは、御霊によってエルサレムに行くことを示されていましたが、そこでなわめと苦しみが待っていることも主は彼に示しておられたのです。ですから、御霊に示されたツロの弟子たちが彼を引き留めようとした時、また預言者アガポが告げたことを聞いて、人々がパウロにエルサレムには行かないよう頼んだ時、パウロは、なぜ彼らがそのようにするかを知っていました。彼自身、これから自分が向かう道が、なわめと苦しみであることを知っていたからです。でもその上で、それを主のみこころと受け止め、彼は従おうとしたのです。

でも、どうですか？なぜパウロは、そのなわめと苦しみの道を主のみこころと確信することができたのでしょうか？明らかに、彼以外の人々は、それは避けるべきものと考えています。もし多数決で行くなら、エルサレムに行かない方が、主のみこころといえるでしょう。でも主のみこころは、もちろん、数の多い、少ないの問題ではありません。では、パウロは、なぜそれを主のみこころと受け止めたのでしょうか？

御霊に示されたツロの弟子たちは、エルサレムに上らぬようと、しきりにパウロに忠告しましたが、すでに見たように、そこには御霊が何を示したかは記されていません。つまり、御霊が「パウロを引き留めない」と彼らに言われた、というよりも、エルサレムでパウロの身に起こることを御霊が示したので、彼らはパウロを引き留めようとした、と理解することができます。

というのも、預言者アガポも、実はパウロの身に起こることを告げただけで、彼自身は、それを理由に、エルサレムに上ってはいけない、とは語っていないのです。それをしたのは、アガポの告げたことを聞いた人々、つまり、パウロの同行者たちとカイザリヤの人たちでした。そうすると、やはりエルサレムに行くことが、主のみこころであった、ということができると思います。では、なぜ主はそのことをパウロ自身にも、他の弟子たちにも知らされたのか？

今私たちは、聖書通読でヨハネの黙示録を開いていますが、そこには終わりの日に起こることが、象徴的な形で預言されています。そして、その主な内容としては、主を信じない者に対するさばきが記されていますが、同時に、主を信じる者に対して、主は、信仰のゆえに受けるこの世での苦しみに耐え忍ぶことを言われます。なぜなら、その忍耐の先には、救いの完成、つまり、御国が約束されているからです。

なぜ主はそのことを私たちに知らせておられるのでしょうか？私たちが知ることで、もはやそこに記されていることが起こらなくなるためですか？いいえ。それらのことは必ず起こります。その必ず起こることに対して、主を信じる者たちが、その日に備えて、目を覚ましているためです。同じことが、この時のパウロにもいえます。神様は、これから彼の身に起こることを予め示すことで、彼がその道を避けて通るのではなく、むしろそれに備えるため、もっといって、なわめと苦しみの中で主イエスを大胆に証するためであったとのことです。そのことは、パウロ自身が、「主の御名のためなら、縛られることだけでなく、死ぬことさえも覚悟しています」と言うことで、あかししています。

ですから、パウロを慕うゆえ、彼の身を心配するゆえに、人々はエルサレムには上らないよう彼に願いました。でも、パウロ自身は、主イエスのこと、つまり、主の御名がエルサレムで証されることを願ったので、たとえなわめと苦しみが待っていたとしても、彼はそれを主のみこころとして受け止めることができたのです。私たちもそうではないですか？もし自分自身のこと、愛する人の身の安全を心配するなら、苦しみを避けるべきものと考えたのではないのでしょうか？でも、それが自分を通して他者が生きるものであるなら、そのための苦しみを、避けるものではなく、耐え忍ぶものとなると思うのです。

ピリポ・カイザリヤにおいて、初めて弟子たちが、主イエスへの信仰を告白した時、主は、ご自分がこれから進まれる十字架の苦難と死、そして復活について彼らに語られました。その時、ペテロが主にどう応答したかを覚えておられますか？マタ 16:22 「するとペテロは、イエスを引き寄せて、いさめ始めた。『主よ。神の御恵みがありますように。そんなことが、あなたに起こるはずはありません。』」。

ペテロとしては、主イエスの身を案じるゆえに、そんなことが起こってはいけないと考えたと思うのです。ところが、主はこのように言われました。マタ 16:23「しかし、イエスは振り向いて、ペテロに言われた。『下がれ。サタン。あなたはわたしの邪魔をするものだ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。』」。主にとって、十字架の苦難の道は、必ず通らなければならないものでした。そのためにこそ、神の在り方を捨て、人となってこの世に来られたからです。でも、ペテロには、それが理解できませんでした。

仮に主が、ペテロの言うことを聞き入れて、エルサレムに行くのを止めておられたら、どうですか？主が、私たち罪ある者の救いではなく、ご自身を守ることを優先しておられたら、救いの道はどうなっていたでしょう？すべての人は、自分で自分を救うしかない。でも、罪ある者は、自分で自分を贖うことができないゆえに、神様のさばきを受けて、永遠の滅びに至る道しかないのです。

でも、主イエスは、エルサレムでご自分の身に何が起こるかをすべてご存知で、それが罪人を救う唯一の道、つまり、神様のみこころであると知るゆえに、自ら十字架の道を進んで下さいました。そこになわめと苦しみが待っていることをすべてご存知の上で、主は私たちのため、あなたのためにご自身のいのちを罪の代価としてささげて下さったのです。パウロは、この主の愛を誰よりもよく知っていました。それゆえに、彼自身がよいよ主イエスに近づけられることで、主が歩まれた十字架の茨の道を、つまり、なわめと苦しみの道を彼もまた進んで行ったのです。

14-15 節「彼が聞き入れようとしないので、私たちは、『主のみこころのままに』と言って、黙ってしまった。15 こうして数日たつと、私たちは旅仕度をして、エルサレムに上った」。自分たちの願いを聞き入れないパウロに対して、人々は「主のみこころのままに」と言って、彼が主から示されている通りに歩むことを受け入れました。皆さん、「主のみこころ」とは、何ですか？あなたは今日、それを求めていますか？それとも、自分の心、その欲するところに従って歩んでいますか？

主のみこころ、それは私たちが、私たちのために十字架にかかり、贖いの死を遂げて下さった主イエスを知ることです。ただ情報としてではなく、心から主を信じることで、この方との愛といのちの関係の中に入れられることです。そのようにして主と共に歩む者となり、私たちの行くところ、そのどこにおいても主を証する者となること、それが主のみこころです。主はそのような歩みをさせて下さるために、ご自身の霊（御霊）を信じる私たちの心に与えて下さいました。御霊を通して、私たちがこの世でのあらゆる試練や困難に耐え忍ぶことができ、最後まで主に信頼するためです。

主のため、主の証のために苦しむことは、決して無駄なこと、意味のないことではありません。それは価値のあるもの、自分のいのちをささげるほどに価値のあるものです。なぜなら、主ご自身も、十字架の苦しみを耐え忍び、その死をもって神様の栄光を現わされたからです。そして、三日目に死からよみがえられることで、主はご自分が真の神であられることを証されました。この方に信頼して歩むなら、決して天国からもれることはありません。主はご自分と共に歩む者、みこころを求め、それを行う者に御国を継がせて下さいます。

ヘブル 12:2-3「信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをもものともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。3 あなたがたは、罪人たちのこのような反抗を忍ばれた方のことを考えなさい。それは、あなたがたの心が元気を失い、疲れ果ててしまわないためです」。